

「新しい東北」官民連携推進協議会
令和５年度 福島県意見交換会（第３回）議事概要（公開用）

令和６年２月２７日
「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

【日 時】令和６年２月２７日（火）１３：００～１５：００

【場 所】復興庁福島復興局／オンライン（Teams）

【出席者】（敬称略）

＜副代表団体＞

一般社団法人ふくしま連携復興センター／福島県／株式会社東邦銀行／国立大学法人福島大学／
株式会社Ｊヴィレッジ

＜復興庁＞

復興庁 復興知見班

復興庁 福島復興局

＜事務局＞

株式会社ＪＴＢ総合研究所

【議事概要】

１ 開会

復興庁より、実践の場実施への協力について感謝を述べるとともに、引き続き闊達な意見交換をお願いしたい旨、挨拶した。

２ 各団体の活動紹介

復興庁、福島大学、東邦銀行より、取組紹介資料（資料２-１～資料４-４）を基に取組を紹介した。

３ 令和５年度取組方針、取組内容等について

資料１をもとに事務局より説明した。

（１）実践の場の開催結果を踏まえた意見交換

本年度の取組として、運営委員会方式を取り、学生の意見を反映する仕組みにしたことについて、学生の意見を取り入れた企画となったことや集客の面でプラスに働いた等の意見が挙げられた。また、地元の自治体職員等の参加により、訪問先の調整等が円滑化された等の意見が挙げられた。このほか、最終的な成果物について、参加学生等それぞれの特徴を活かしながら創意工夫したパネルが作られたことが良かったという一方で、学生一人一人の意見が見えづらいものであったことや、アウトプット方法など位置づけに関する議論が不十分であったといった反省が挙げられた。

（主な意見）

- ・主催者のＪヴィレッジとしても、今まであまり話ができていなかった方々と接する機会をいただき、感謝。
- ・事務局の方でよくまとめているので、振り返りとしては、事務局資料の内容でいいのかなと思う。
- ・今回の企画は若い学生に福島の今や新しい姿をしっかりと知って学んでもらい、これから自分がどの

ような活動をしていくか考えていただく素晴らしい企画だったと考えている。

- ・企画としては、学生さんの満足度が高く、有意義な事業だったという評価があったので、関係者のご努力により、素晴らしく成功を収めたのではないかと思います。
- ・運営委員会方式で学生に参加していただいたおかげでタイトル、行程、発表について学生の意見を取り入れた企画になった。また、運営委員会メンバーの学生から学内に呼びかけをいただいたこともあり、参加者募集に繋がった。
- ・学生の参画、運営委員会方式については、実際にやるのはすごく大変である一方、集客については成功している。大学でも学生主体の企画をいくつかやるが、大きな要因の1つには学生自身に委員や企画者として参画してもらっていないと集客がすごく難しいということがある。もう1つは、若者の感覚にフィットしているかとか、「意外とそういうことがネックになるんだ」という点など、我々が気づけないことがある。次回も、やるならば必ず学生に参画してもらって運営委員会のような仕掛けは必要かなと思う。一方で、ある程度設計、タイトル、コンセプトに関して学生の意見を集約してまとまったら、「あとはこっちでやっておくから」という形でもいいと思う。定員を超えて一部お断りもしたというのは主催側としてはすごく良い状態で、このまま広がっていったら集客に苦勞しなければ運営としては安心してやりやすくなる。この状態を維持して来年、再来年に繋げていくことがすごく大事なかなと思った。
- ・運営委員会の反省点として、今回19名とメンバーが多かったため、日程調整等が困難であった。全体の運営委員会の進め方として、コンセプトやタイトルの設計の段階では、若者のアイデアを活かしたが、企画の詳細設計においては事務局側が調整していく段階であり、運営委員会の場で決まることは少なく、後半になるにしたがって学生からの意見を伺うメリットが小さくなってしまったという印象。
- ・なかなかメンバーが集まらなかったという反省点が挙げられたが、学生が常時2～3人参加して7回も開催できたことが非常に今回の企画の充実に繋がっていると思うので、決して少なかったとは思わない。苦勞したと思うが、運営委員会は素晴らしく成功したのではないかと感じている。
- ・運営委員会に地元の自治体職員等にも参加いただいたことによって、訪問先の案出しや、その先の調整が円滑化された部分があった。
- ・富岡町の移住・定住担当の職員に協力いただいたため、広範囲にいろいろな方をご存知で、富岡からいろいろな方をご紹介いただいた。他の自治体でも熱心な職員の方はおられるし、まちづくり会社などにも人脈をお持ちの方はおられるので、そういう方に参画していただくと調整等が楽になるし、中身も良いものが生まれるのではないかなと思う。
- ・協力事業者が多い企画となったため、説明会の個別開催などの工夫を行ったことはよかった。当初は想定していなかったが、説明会の中で意見をいただいて盛り込んだコンテンツもあった。事業者との密な連携を早めに組んでいく必要がある。
- ・スケジュール関連については、ちょっと詰め詰めなところがあったかなと感じた。2日目の夜は、学生さん方もやる気があってパワフルで日付を跨ぐ前後まで頑張っていたので、学生さんのバイタリティが感じられて、良かったかなと思っている。
- ・2泊3日というスケジュールは本当にちょうどよいが、更に1日目はある程度、見るところはゆったりでもいいのかなと思う。
- ・発表については、参加学生等がそれぞれの特徴を活かしながら創意工夫が見られて良かった。ポスターセッションでかなり活発な意見交換が行われている。一方で、事業者への再確認、ファクトチ

ェック等が不十分な部分が時間の制約上、どうしても生じてしまった。

- ・終わった後にパネルを見ながら改めて振り返ると、ふるさとをテーマに目指したい・目指すべき姿を考えたときに、もしかしたらもう少し学生の個人の考えとか、そういうところを掘り下げた部分が見えてもよかったのかなと感じた。今の学生は器用だし上手くまとめる力はものすごくあるなど思ったが、それに対して学生が「じゃあ自分なら」とか、そういう視点をもう少し持っても良かったのかなと私どもも反省したところだ。
- ・去年に比べると学生一人ひとりの意見や顔がちょっと見えなかったなという感想を抱いている。限られた時間でやることなのでどこに力点を置くかという問題になってしまうが、去年は企画を出すということで、1泊2日で企画会議みたいなものをやる中で、当然個人の意見や考えを聞いたのだが、今回は「聞いてきた人の話をまとめる」ということなので、学生一人ひとりの意見や、どういう考えを持って福島に関わっているのかということところがちょっと見えない側面があったと思う。ただ、どこに力点を置くかということなので、やむを得ない部分もある。
- ・ポスターに関しては、学生の感想にも「何に使うためのポスターなんだろう？」という意見があった。私たちの中でも着地点や最後にどうするのかということ、アウトプットをどうするか、何となく曖昧なまま最後まで来てしまった。そこは単に「みんなが学んだことの成果発表」と割り切って外には出さないというのも1つの手だ。教育現場でもそういうことはよくあって、外に出すわけではないが、何を学んだか確認するためにポスターを作らせる。出来上がったものが良かったので本当は外に出したいが、ファクトチェックがネックになる。手書きの良さもあるが、すべてPCベースにしてもらって、終わった後に事業者に送ってやりとりを続け、これで良いというものを出すということではできなくはないと思う。なるべく出せた方がいいし、学生が作ったポスターがたまっていると、福島ふるさと愛プロジェクトで作ったポスターがこんなにたまっていますよということになって、成果としても見せやすいのかなと思う。愛ポイントをたくさん集めたトップ3だけ公開するという手もあれば、せっかくだから全部公開するという手もあるし、やり方はいろいろある。
- ・アウトプットについては、つい「何か成果を出さない」と思ってしまうが、ファクトチェックまでしなくても、成果を発表するだけでもいいのではないかな。成果物を一生懸命作るのもいいし、または参加者同士の交流を目的としてもいいと思う。発表の在り方は、そこまでしっかりしたものを作らなくてもいいような気がする。
- ・アウトプットについて、運営委員会での議論でも、インターンシップなど今後に繋げるようなプログラムにしたかどうかという意見もあった。また今回ご協力いただいた事業者からも、単発の企画ではなく、その後に繋がる必要があるという意見をいただいた。

(2) 次年度の取組に関する意見交換

今年度の企画について、若い世代に福島が抱えている課題や魅力を伝えるとともに、現地事業者間の連携の創出につなげるということの重要性が共有され、次年度も同様の企画を継続するということで合意を得た。

また、継続する場合、例えば、夏季に1泊2日で学生や事業者を集めた企画会議を行うなど、学生に企画の検討に参画してもらう仕組みを講じた方が良いといった意見や、今年度の企画に参加した学生のメーリングリストを作成してはどうかという意見、主催のJヴィレッジにメリットのあるようなアウトプットの在り方を検討する必要があるといった意見が挙げられた。また、今後の企画の継続を見据えると、県や自治体の移住・定住担当者、移住支援センターやホープツーリズム事務局とも連携しながら企画を進めていくことが考えられるといった意見が挙げられた。

今回得られた意見を踏まえ、来年度の企画の検討を進めていくこととした。

(主な意見)

- ・事務局としては、今回の企画は学生の参加の感想や協力事業者の感想を見ると、若い世代に福島県が抱えている課題や魅力を伝えるとともに、現地事業者間の連携の創出に繋がる、自身の活動を見つめ直すといったポテンシャルを秘めているものではないかと考えており、主催の J ヴィレッジの考えを尊重しつつ、引き続き応援できればいいのではないかと考えている。一方で、今後 J ヴィレッジのみで実施するためにはまだ課題があるため、マニュアルの作成など運営上のノウハウ等の蓄積を行っていくことも考えられると思っている。
- ・事業が育ってきているという手応えがあって、去年参加した人が今年も参加するとともに仲間に声を掛けてくれていて、「人に勧めたい」の割合が8割という状況なので、来年度は、ぜひ継続して実施するべきだと思う。
- ・次年度の取組としては、やはりこのような協議会の形で行った方がよろしいのではないかと。来年度のサッカーのインターハイや2025年度のデフリンピックの開催という機会もとらえ、福島のことを学びながら J ヴィレッジの魅力も発信する、またそれを通してSDGsなども考えるような内容に将来なっていくのもいいと思った。
- ・次年度の取組について、若い世代の方に福島県の抱える課題や魅力を伝えるということが非常に重要だと思っている。支援側から見ると、大学生も含めて被災地に関わってくださっている方が、ボランティアという形だとだんだんと少なくなって来ているというところがある。一方で、地域づくりということになると多くの若い方たちが被災地にどんどん根を下ろしていろいろなことをやってくださっている。また、20歳前後という時期に、ふるさとを1回考えてみる時期として、学びのフィールドを提供できるような事業は継続していただきたいと思っている。
- ・ジャストアイデアも含めて申し上げるが、J ヴィレッジが主催として完全に1人でやるとなると、マンパワー的にも、経営的な部分でも極めて難しい。一方で、今回の取組の「福島県が抱えている課題や魅力を伝える」「事業者間の連携創出」という趣旨はもちろんその通りだと思うし、福島県魅力を発信していくことは J ヴィレッジの使命の1つでもあると思っている。本当に独り立ちというところまで将来的に見据えていくのであれば、徐々に徐々にそういう方にシフトしていくような形に変わっていかないと難しいと思っている。株式会社として「やるのだ」というジャッジができるためには、J ヴィレッジにもメリットがあるようなもの、例えば食事の商品開発、レストランでの情報発信、お客様向けに販売するアクティビティの造成などについて学生に議論していただいて、J ヴィレッジの中で形にしてアウトプットを出すみたいなことはもしかしたら、あり得るのかなと考えた。少しずつそういうような形での変化をしていかないと、また来年同じ議論をすることになってしまうのかなと感じる。
- ・(J ヴィレッジと地元企業とが連携したアウトプットについて、) 難しいが、地域の特産品などを使った新商品の開発は一番イメージがしやすい。
- ・コラボのアイデアについては、J ヴィレッジにおいても頭の整理を進めていただき、今後の検討につなげていきたい。
- ・事業所間の連携で創出されるものはものすごく大きい。連携と協働によって生み出されるものは、観光や伝承に繋がる。商品に繋がるということですので可能性を秘めているものだと思うので、ぜひそちらの方も視野に入れていただきながら、多くの事業所さんが、地域にある限られた資源の活用というか、プラスアルファで県外からの社会資源を投入していただくような、そういう組み立てで繋がって、協議会という形になるかとは思いますが、進めていただければと感じている。
- ・多数の事業者を巻き込んだ企画となると、J ヴィレッジが全ての事業者と直接調整するのはおそらく難しいため、現地自治体、地域おこし協力隊、副代表団体との協力の中で現地の事業者と繋いでいく、調整するような体制を組むことを本格的に考えていかないといけないのではないかと思います。

- ・令和7年にどう繋げるかという課題について、1つは、福島県の移住・定住などの事業、あるいは観光課のどちらかだと思うが、浜通りの幅広い自治体に協力してもらっているのだから、県に参画していただいて、各自治体も後援、協力してもらうような形にすると、各市町村の移住・定住担当のような立場の方も参画しやすい。「移住・定住に結び付くイベント」みたいな形で県にまとめていただいて、各自治体が参画して、魅力ある人を挙げてもらって、そこを訪問してPRする。浜通りの魅力をJヴィレッジから発信することも入れた形とし、福島大ももちろん参画させていただく。県の移住・定住事業の一環で予算化されるみたいなことになればいいと思う。各自治体には予算なしで協力していただくとして、各事業者とも、インターン受け入れ的なメリットなどのきめ細かい調整を各自治体に期待しつつ、協力していただけたところには協力してもらう。参加する学生にも満額を学生たちが出すというのはやはり想定し難いが、一部負担を求めるところは求めるという形がいいのかなと思う。
- ・ふくしま12市町村移住支援センターや、ホープツーリズムのサポートセンターなどを使って、事業者との調整は移住支援センターにやってもらうなど、そのような連携もあるのではないかなと思った。そこで復興庁が予算を付けるから「ふるさと愛プロジェクト」を冠に付けることを使用条件にするなど、そのようなことも1つのアイデアとしてはあると思った。相双地方振興局もあるし、ふたば復興事務所も県で持っている。そのようないろいろな団体と連携して、負担をかけないようにやっていくのがいいと思う。
- ・移住支援センターなどの団体と連携を深めていく仲立ちを復興庁や事務局がやっていく中で、Jヴィレッジも加わりながら関係性を繋いで構築していくということが1つ、体制面では必要なのだろうと思っている。一方で、「復興庁の事業」としてやるというよりは「官民の事業」として、県も副代表団体として入っているという形で協力していくという形の打ち出し方ができればと思っているので、県ともよく相談させていただきたい。
- ・事後的な繋がりについて、「ふるさと愛プロジェクト」というせっかく冠に使えるものがあるので、とりあえず「ふるさと愛プロジェクト」のメーリングリストを作って、参画してくれた事業者、学生に参加してもらって、運営要綱みたいなものは作った方がいいが、基本的には各事業者からも自由に情報発信してもらってはどうか。例えば富岡町なら町が主催するインターンシッププログラムは来年も企画していると聞いているので、あれだけ意欲のある学生たちに情報を届けられると、それだけでメリットになると思う。福島大としても、他大学の学生を対象にしたような企画をするときに、あそこに来てくれた子たちに情報発信できるのはメリットだ。そういうメリットを感じてくれる事業者であればいいのかなと思った。
- ・福島大学が実施している福島県の復興支援専門員設置事業の取組では、各自治体と一緒に、各自治体の中にサークルやグループを作っていくって、我々ができなくなってもそこで取り組めるようなればいいなという形でやるように心がけている。福島ふるさと愛プロジェクトという冠で、参画するそれぞれの主体が無理のない範囲で取り組めるような。各主体が何かをやるときにも使える、シナジー効果があるようなものとして、簡単なものではメーリングリストを作ってみたり、各団体の取組や成果を発表できるサイトを作ったりということぐらいはできるのかなと思った。福島大学そのものは福島県内にあって令和7年を超えても存続し続けるため、そういう形でふるさと愛プロジェクトという冠を維持する柱の1つになればいいなと思っている。
- ・民間企業がボランティアでやるには限界があるので、無理のない範囲で、いかにパフォーマンスが上がる事業として継続していくかというのが必要と思う。来年までは予算が付くとしても、再来年度以降も継続するには、福島ゆかりの事業者、関係団体の方だけで自走できるのか。本来必要なもので大事だということはよくわかるし皆さん理解されていると思うが、では継続していくか、主たる事業者さんのマネタイズはどうなのかというところは、やはり考えていかないといけない。継続

することには異論は全くない。ただ、過度に負担をかけるようなことがないようにしないといけな
い。たぶん次年度はバランスを取りながらできるとしても、それ以降、良い事業、取組として継続
するためにはもう1つ工夫が必要。ルールを変えるのか、財源を確保できるのかなど整理する必要
がある。

- 来年度事業に関しては早めに取り組み始めた方がいいと思う。学生の実行委員会も夏休みに動けれ
ば対面で何回か議論できたり、来年はホープツーリズムさんなど参画主体を増やすのであれば、1
回集まってもらって場所を作って「本当にやるんだよ」ということを夏にでも呼び掛けて顔を突き合
わせてやる。その場に学生もいた方が本気になりやすいというか、そういう場を夏に持てるとエン
ジンがかかりやすい気がしている。夏に向けて本当に関わってもらいたい人を集めて1泊とか、日
帰りでもいいので集まって話ができるとすごくいいのかなと思う。そこで基本的なコンセプトやア
イデアを出してもらって、後の関わりは定期的なものは無しとして、2月に向けた声掛けをしても
らうという形がいいのかかもしれないと思った。

4 閉会

第3回意見交換会では、次年度も本年度の取組を継続していくことで合意が得られた。今回の議論
の内容を踏まえて、来年度の体制や最終的な成果物、取組の事後展開などについて、事務局で検討を
進めていくこととした。

(終了)